

「東日本大震災の救護活動を振り返って」

第6救護班 主事 医事課 阿部 育子

～～～ 出来る限りの活動をさせていただいたような気がしました ～～～

3月16日、あづま体育館避難所にて初めての救護活動に参加した。当避難所には、被ばくのチェックを受けるための避難者の列ができていた。

暗くなったころ、双葉病院から患者が搬送されて来るとの連絡があり、受入れ準備を行った。自衛隊の協力で体育館に搬入される際、「もう大丈夫ですよ。」と声を掛けても返事のない患者がほとんどであった。救護班員として「できるだけのことやる」という訓練での教えを思い出しながら活動にあたった。活動が終わった時には24時を過ぎていた。翌朝、夫が着替えと食事を持って病院に届けてくれた時には、家族のありがたさを楽しみ感じました。

その後踊りを習い、最近は施設でのボランティア活動もしている。

2011年3月11日、午後2時46分に東日本大震災が発生しました。

今まで経験したことのない激しく長い揺れが続きました。

私は本4階病棟へ行き、小児科病棟の病室の扉が閉まらないようにガムテープで扉を固定する作業を手伝い、その後、点滴台を抑えたり、個室の患者さんを励ましながら揺れがおさまるのを待ちました。

それからは、余震と原子力発電所の事故に不安や戸惑いを感じながらも、家事と職場での非日常的な忙しい日々を過ごしていました。

私に出動命令が出たのは3月16日の午前中でした。それまで、訓練に参加しても女性事務職員が救護活動に出動したことはなく、そんなことから、出動命令が出た時は「日本赤十字社の一員として精一杯頑張ろう！」と勇気が湧いてくるのを感じました。

福島県支部で毎年行われている救護訓練にはそれまで2回参加したことがありますが、現場での活動は初めてなのでとても緊張しました。しかし、出動準備をしている時や移動の車の中で、救護活動を経験したことのある医師や看護師・主事に教えてもらった事や体験談は大変参考になり、後の活動にとっても役立ちました。

私が救護に向かったのは、あづま運動公園体育館です。当日は雪が舞っていてとても寒かったのですが、体育館入り口周辺ではサーベイメーターによる被ばくのチェックを受けるために、寒さに震えながら順番を待つ避難者の方の行列が続いていました。軽装でサンダル履きの方もいて、津波や原発から着の身着のまま逃げたような様子でした。

体育館職員の方たちに挨拶をして、医療機材を体育館の一室に運び入れ、救護所の設営に取り掛かりました。

患者さんの動線を考えながら救護所のレイアウトを決め、「足りないものは、あるものを工夫して使う。」と、カルテを保管するためのカルテ棚は廃品のダンボールを利用して作りました。

受付、診察室、処置室などを整えて「救護所」と「赤十字マーク」の旗を掲げた後、救護所が設置された旨を館内放送してもらおうと、数人の方が受診に訪れました。

手持ちの薬が切れてしまったという方が多く、胃の調子が悪い、熱があるという患者さんもありました。動くことが出来ない患者さんのところへはチームで往診に行きました。

救護所に在庫がない薬は、調剤薬局にお薬手帳か残薬を持参すれば1週間分処方されるようになっていましたが、ガソリンが無いために車が使えず、薬を配達してもらうことも貰いに行くことも出来ない状況で、雪の中を歩いていくしかありませんでした。

出動する前の情報では、双葉の病院から40人ほどの患者さんが運ばれてくるという事でしたが、なかなか患者さんが到着しません。

暗くなり始めたころ、やっと双葉の病院から患者さんが30人近く運ばれてくるという連絡が入り、全員バスに乗ってはいらぬものの、折り重なる状態で乗せられており、もうすでに亡くなっている方もいるかもしれないという情報でした。

自衛隊もこちらに応援に向かっているとのこと。救護所全体に緊張が走りました。

搬送方法、トリアージ、搬送する部屋、ベットの並べ順、処置台の位置、医療機材、材料、薬剤、カルテ、診療

の流れなど、全てがスムーズに行くよう、医師、看護師、薬剤師、事務が出来る限りの準備を整えました。

しばらくすると、次々と患者さんが運ばれてきました。

入り口で医師によるトリアージを受けてタックを付けた患者さんが、自衛隊員の整然とした機敏な動きや掛け声と共に担架で運ばれてきます。毛布に包まれ、体が冷え切ったお年寄りの方ばかりです。更にもう 1 枚の毛布を掛けて身体を温めながら、「もう大丈夫ですよ。」「寒かったですね。」「名前を教えてください。」と声を掛けても、返事の無い患者さんがほとんどでした。

なかなか声が聞き取れない患者さんもしれば、大声を出せる患者さんもありました。

名前がわからない患者さんには、ベット脇の点滴台と患者さんの 2 箇所と同じ番号札を付け、枕元に同じ番号のカルテを置き、患者の取り違えが無いように注意しました。

カルテに名前だけでも記入出来ればと、パジャマや下着、オムツに書かれてある名前を懸命に探しましたが、3 日間以上オムツや下着を取り替えられていない患者さんたちばかりなので、着ているものはグチャグチャでした。

神奈川県日赤救護班の看護師さんが、次々と運ばれてくる患者さんに優しく声を掛けながら、素早い動きで細い血管に点滴を刺していきました。

ひと段落着いたので「何か手伝えることがありますか？」と聞くと「点滴ルートを作ってください。」と頼まれました。

私は、点滴ルートの作り方を習い「出来ることは何でもやること。」と教えてもらった事を思い出しながら、緊張しつつ点滴ルートを作りました。点滴が身体に入り体が温まってくると、患者さんの顔色が次第に良くなり、元気を取り戻してきました。何日も食事や水を摂っていないので、「水～、水をちょうだい～！」と必死に水を求める声が聞こえてきました。

医師に確認して少しずつ水を口に含ませると、必死の形相が和ぎ、穏やかな顔に変わります。苦しそうに呼吸をしている患者さんの首に巻かれた包帯の下には、穴が開いていました。

地震や原子力発電所の爆発が起きるまでは管が入っていたのでしょうか。このような重症の患者さんも、管を外されてバスに乗せられてくるという現実、災害の恐ろしさを感じました。

引継ぎの時間になりました。

時計は 24 時を回っていました。何時間経過したのかも分からないくらい慌ただしい時間の流れと業務に、これが災害救護というものなのだとつくづく思いました。

力不足だったかも知れませんが、私の出来る限りの活動をさせていただいたような気がしました。同じ救護班のメンバーも、各々の持ち場で必死になって活動していました。

病院に到着して救護服を着替えるために、なんとか更衣室まで行きましたが、もうこれ以上体が動かなくなってしまいました。本当に疲れて家に帰る体力も残っておらず、その日は更衣室に泊まりました。

翌日の朝早く、「お疲れ様。」と、夫が着替えと朝食・お弁当を病院に届けてくれ、家族の有り難さをしみじみと感じました。

その後、私は踊りを習いはじめました。

あの日、体育館のホールでギターを片手に歌をうたい、避難民の方を励ましていた若者や、寒い空の下で暖かい料理を提供しているボランティアの方を、素晴らしいなあと感じたからです。「私にも何か出来たら・・・」と、踊りを始め、最近施設に行きボランティアとして愉快的踊りでお年寄りを笑わせています。

これからも、日本赤十字社救護活動の一員としてしっかりと活躍できるよう、健康な体と心、仕事のスキルを高めるよう、努力していきたいと思っています。